

## 対話において一番大切なことは何か

2010年6月16日(水)17:00～ 中央図書館3階セミナー室D

哲学コース 3年 想田 瑞恵

### 【3つの疑問】

#### ① 自分の気持ちを何よりも大切に思い、「傷つきたくない・傷つけたくない」と願う「自分の気持ち至上主義者」である私に、「対話」はできるのか

「自分の気持ち至上主義者」であることに行き詰まりを感じており（自己肯定感が薄いなど）、その唯一の解決策が対話の実践であると信じている。しかし、対話の前提「気持ちは回復できるものである」がどうしても受け入れられない。「傷つきたくない・傷つけたくない」と願うのは、その場の気持ちというのは修復できないと思っているからだ。どうすれば両者の前提をすり合わせることができるか。また、自分の前提を押し付けないのが対話だが、「自分の気持ち至上主義者」も、自分の気持ちは自分だけの大切なものなので、押し付けようとはしていないはずだ。他にも「勝ち負けにこだわらない」や「表現し相手に反応を返してもらうことを繰り返す」という対話の定義も、「自分の気持ち至上主義者」はクリアしていると思うのだ。しかし、対話と違い、自己肯定感（自尊心）や「自分」というものの獲得には至らない。両者のコミュニケーションは、何が違うのか。

#### ② 対話が尊重し、突き詰め、明確にしようとする「他者との差異」とは結局何であるか

「本当の自分」、「純粋な自分」、「君にしかできないこと」、「あなたらしさ」、「あなたの強み」など、いわゆる「個性」に代表されるような言葉が氾濫している。「ありのままでいい」や「そのままの君でいい」という言葉も、「あるがままの君がすでに素晴らしい個性の持ち主である」という意味に思える。これらを、「内向きの個性（気持ちも含めた）」と呼ぶなら、対話において、他者と関わることで形成される「個性」とは何か。

#### ③ 対話で得られる自己肯定感とは、無条件のものか

「個性（特別）」を渴望することの背景には、「他人と違う自分だからここに居てもいい」という、いわば条件付きの自己肯定がある。ゆえに、個性が見つからないと苦しくて仕方がない。そこで私は、対話の、「発言内容は否定しても、その人がいることは承認する」というところに、無条件の自己肯定を見出して、苦しさを解決しようとしている。しかし、それは解決されているのか。対話においても、発言しなければ承認はないのではないか。つまり、「その場で発言すれば」という条件のもとで承認されている気がする。そうであるならば、はたして、対話で得られる自己肯定感とは、いかなるものか。

以上のような疑問を中心に、話を展開していきたいと思っています。私の疑問を払拭してくれたり、分析して応援してくれたりすると、嬉しいです。このように、偏った個人的関心から始まってはいますが、最終的には、みなさんと納得して、対話のありかたを共有できたらと思っています。そのためにも、たくさんの方の参加をお待ちしています。

※当日は、この資料とは別のレジюмеも準備するつもりです。